

短編0039



「
口紅
」

夢田 小波

奈良県立畝高等学校

表紙

「あん時も、こんくらいの蒸し暑さやったなあ」

孝夫は、びくつとして、縁側に腰かけ団扇を動かす新妻の背中を見遣った。指に挟んでいた煙草から、灰がポトツと落ちて座卓を汚した。

両家の家長が決めた縁談によって嫁いできた彼女は、こんなふうに独りごとを言うような気質ではない。日頃の口数は少なく、ときおり何処を見ているのかわからない表情をするような、腹の底が知れぬ女だ。だから孝夫は、ずっと床の間に鎮座していた市松人形が、なぜか卓袱台の上へ置かれていたのを見たかのような、みように落ち着かない気分になった。

縁側から届く日光が、妻の姿を薄暗く縁取っていた。孝夫は、新しい煙草に火をつけて、淡々と語りだす妻のうなじのあたりに、目を凝らしていた。

私の実家のすぐ近くに、入ったらあかんって言われる町があったんです。母から、そろそろもう口酸っぱく、行くなって言われて。実際、なんや雰囲気が他と違つとって、妖怪の住処みたいで怖かったさかいに、私も妹も母の言いつけを守つとりしました。

でも、小学校の一年生のときにね、私、そこに通つとったんです。夏の間だけ、こつそり。さいしょっから自分の意志で行ったんと違いますよ。そこらの猫を構いとうて追っかけとつたら、その町……町って言うほど大きゅうも無うて、小こい宿場町みたいなとこやけど……の、路地裏まで行つてしもうたんです。氣いついたときは焦りましたで。暑いから汗かいとんのか、それとも冷汗なんか、自分でも、よう分かりやしませんでした。

そのとき、チヨさんと出会ったんです。ほんまに綺麗な姉さんでした。青い浴衣も、顔も声も仕草も、ぜんぶ。ほんとで私、チヨさんにえらい懐きました。暇あ見つけたら、周りの目え盗んで、あの町の路地裏へ行つとりしました。まあチヨさん忙しいんかして、会えん時もあつたけど。チヨさんとお喋りしたり、地面にお絵かきしたりすんのが好きでした。チヨさんの白い首筋が汗で光つとるのを見るのが好きでした。チヨさんが飲ましてくれたラムネ、おいしかったなあ。

チヨさんが体調崩しとったときは、黒うて重いもんが胸の真ん中を突き抜けた感じがしました。チヨさんがいる部屋が、ちょうど路地裏に面しとって、その窓ごしにチヨさんの顔を見ました。チヨさんが住み込みで働いとるって言うてたとこの窓は、格子がついとって、チヨさんの部屋の中へ身を乗り出すことはできんかったんです。まあ身長も足りんかったけど。いつもは綺麗な浴衣着てたのに、部屋におるチヨさんの襟元には、えらい使い古した布地が見えて、その瞬間、はじめてあの路地裏に来てしもうた時みたいな気分になりました。私は何も言えんと突っ立つとつたら、チヨさんが格子の間から手を伸ばしてきました。ほんで、そこに握つとるもんを私の手に持たせました。「昔、親切にしてくれはった人に貰うてん。和子ちゃんにあげる」言うて。可愛らしいお猪口の内側に、紅が塗り付けてあるもん

でした。紅猪口いうやつです。チヨさんの、大根みたいに白おてすべすべした肌と同じくらい、私の目えを釘付けにしりました。手から伝わる紅猪口の固さと、チヨさんの手の柔らかさと、全身に纏わりつく熱い湿気とを感じて、心臓がばくばくしました。

それから、どうやって家まで帰ったんか、よう分かりません。ただ、チヨさんの唇の色：口紅の色が、頭ん中にこびりついとりました。あの日以来、チヨさんに会いに行くことはありませんでした。七年くらい前に、新しい法律ができましたでしょ。そんな時、あの町の店は全部、商売を変えはったみたいです。あのひとの消息も、もう分かりません。

あのひとの優しいまなざしが好きでした。あのひとの柔い指が好きでした。あのひとの白い首筋が好きでした。あのひとの華奢な耳が好きでした。ほんまに綺麗やった。今日みたいに暑い日は、それを思い出します。…孝夫さんには、話とこかなと思おて。急にすみませんでした。

風鈴が鳴っている。孝夫は、こわばった眉間を揉んだ。汗に濡れたランニングシャツが肌へ張り付いて、いやだった。

「…：ほんで和子は、その紅猪口とやらを、どないしたん」

妻が身じろぎをした。孝夫は甘苦い煙で口中を満たしながら、目を細めた。昼寝から目覚めた直後のようにぼんやりと痺れていた頭が、冴えていく。和子が、おもむろに孝夫の方を振り返った。視界を覆うように吐き出した白い煙の向こうで、和子の紅い唇が動きかけて噤まれるのを、孝夫は見た。

もうひとつ尋ねようとして、やめた。

(二)

少女の生家は神戸の貧民窟にあった。きょうだいが沢山いた。空はいつも煤けていた。汗と便所の臭気が支配する家だった。街の人間が落とす野菜屑を拾うのが日課であり、飢えしのぎであった。

ある日、少女は親に売られた。貧乏やから仕方ないか、と少女は思った。

売り飛ばされた先での生活は、貧民窟にいたところと何ら変わらない辛さだった。一挙手一投足にケチをつけられて殴られることが無いぶん、生家の方がましだったかもしれない。少女は逃げた。山を越え川を越え、こっそり汽車に忍び込んだ。逃げて逃げて逃げて、腹が減って歩けなくなった。いつのまにか足を挫いていた。身体も着物も傷だらけだった。少女は、ぼんやりと路傍に横たわっていた。体は泥のごとく地面に吸い付いているのに、まわりの空気はふわふわして覚束なかった。

空が薄紅色に染まるころ、一人の青年が少女の前で立ち止まった。青年は少女を自身の下宿屋に連れて行って、介抱してくれた。

少女が行き着いたのは大阪の町で、青年は下宿で暮らす学生であった。東京の言葉を喋る

人だった。大学で化学の研究をしているのだという。青年は少女の名前を尋ねた。憶えていないと少女は答えた。青年は、少女に「チヨ」という呼び名をくれた。チヨの体が良くなるまで、青年は少女の世話を焼いた。彼が頼み込んだらしく、下宿屋の大家の婆さんがチヨを風呂に入れて、清潔な着物を着せてくれた。

青年はチヨに仮名文字の読み書きを教えた。年季の入った三畳間に机がわりの木箱を置いて行われる「授業」が待ち遠しくて、チヨは青年が大学から帰ってくるのをそわそわしながら待った。チヨは飲み込みが早いなどと言って頭を撫でてくれる青年の手は、すべすべで、ごつごつしていて、あたたかかった。その手がチヨの挫いた足の様子を診るのを見てみると、胸に火がついたような、ほわほわした心地になるのを感じた。

身体が元気になると、チヨは青年に別れを告げた。これ以上迷惑をかけるのは嫌だと思っただからだ。青年がときどき財布を覗いて苦い顔をしているのを、チヨは知っていた。

青年はチヨを引き留めようとした。こんな小さな子供を見捨てられないと言った。金のこととは気にするなとも言った。チヨが断ると、それなら養い親を探すからと食い下がった。さんざん世話になったのに、そこまでしてもらうのは申し訳ないとチヨは言った。それでも青年はチヨのことを心配した。けれどもやがて、出ていくと言ってきかないチヨに根負けした。

青年はチヨに細長い瓶入りの飲み物をくれた。ラムネというらしい。飲んでみて、チヨは目を丸くした。こんなに甘いものは口にしたことがない。しゅわしゅわする飲み心地が気持ちよかった。それから青年は、チヨに新品の紅猪口と紅筆を渡した。

「水をつけた筆で紅をすくって使う。これで身なりを綺麗にしなさい。身綺麗にしていれば悪いことはないからね。みんな丁寧に接してくれるし、誰かが拾ってくれるかもしれない。チヨは別嬪だし」

そう言って、青年はチヨの頭を撫でた。力になってやれんくてごめんと言われて、チヨは青年を抱きしめたくなった。青年は幾らかの金もチヨに渡そうとしたが、チヨは頑なにそれを辞した。翌日の早朝、チヨはひっそりと下宿屋を出て、また汽車に忍び込んだ。

適当な駅で降りると、そこは大阪より少し田舎な町だった。青年がくれた紅を唇につけて、チヨは駅から出た。ぶらぶら歩いていると、初老の男に声をかけられた。

チヨは男について行った。服と飯と宿を保証するから店で働かないかと言われたのだ。売り飛ばされた場所での生活を思い出して、ちらと不安がよぎったが、背に腹は代えられないと思った。とにかく稼ぐ術が欲しかった。

チヨが初老の男に導かれてたどり着いたのは、提灯と旅籠のような店が連なる、小さな町だった。入口の看板に何か書いてあったが、チヨには難しくて読めなかったから、内容はよくわからなかった。連なる店のうちの一軒で、チヨは下働きを始めた。店には若い女が沢山いて、皆、喋る方言が微妙に違っていた。店は、窓という窓に格子がついていた。表の通りには、男の人が沢山いた。それらのことについて、チヨは特に何も感じなかった。感動も嫌

悪も抱かないまま、ただただ、これで食っていけるといふ事実にあぐらして日々を重ねた。青年にもらった紅猪口と紅筆は、いつも懷に忍ばせていた。

季節が何度か廻って、チヨは店で本格的に仕事を始めた。いつのまにか、客のなかにある大阪の青年の面影を探すようになっていく自分にいることに、チヨは気付いた。仕事用の化粧道具はあったが、チヨはときどき紅猪口の紅を使って青年のことを思い出していた。

チヨは「アメリカ」との戦が始まったと噂で聞いた。おおごとなしいが、実感は薄かった。普段の食卓に水っぽい芋粥が登場することが増えたのを除けば、チヨの暮らしは、たいして変わらなかったのだ。

ある日、初々しい客が来た。ちょっといいところの坊っちゃんという感じの青年であった。同僚らしき男たちに半ば引きずられるようにして街を歩いていた彼は、同僚たちに促されるままにチヨがいる店に来て、チヨの客となった。彼に、あの大阪の青年の面影が重なった。彼はその後何度か店を訪れた。そのたびに、チヨは紅猪口から紅をとった。

日がたつにつれて、戦争が起こっているのだという実感は厭でも大きくなっていった。もともと質素だったチヨたちの食事は、どんどん粗末になっていく。栄養不足で月のめぐりが止まる女も多かった。チヨが大阪の青年の面影を見た彼は、ぱったりと来店しなくなった。それでも、チヨたち店の従業員を伴って宴会を開く者もいた。金はあるところにはあるのだと、チヨは学んだ。

あるとき、チヨは熱を出して寝込んだ。全身に紅い発疹が出て、きつかった。仕事仲間にも、そういう症状が出る者はちよくちよくいたし、チヨのそれも、しばらくすると治ったので、また仕事に復帰した。

神戸が大きな空襲に遭ったと噂で聞いた。家族はもう生きていないかもしれない。ぼんやりとそう思った。かなしくはなかった。

大阪が空襲で酷く焼けたと噂で聞いた。また、あの青年のことを思い出した。腹の内側をザラザラした手で撫でられているような心地がした。青年のことを思うと、胃が重くなって、胸を掻きむしりたくなった。身を焦がす、激しい焦燥だった。その日、チヨは初めて、彼女らを伴って酒を愉しむ得意先に対して「腹立たしい」という感情をおぼえた。相変わらず、金はあるところにはあるのであった。

戦争が終わった。幸い、チヨが暮らす町は、以前よりは状況が厳しくなったものの、商売を続けることができていた。

それから、数年の月日が過ぎた。

日差しの強い昼下がりがだった。クマゼミが鳴いていた。このころのチヨは、日課の水撒きを終えてから店の裏手にまわって、一帯を縄張りに行っている野良猫と戯れるのを楽しみにしていた。その日も手桶を片手に猫に会いに行くと、小さくて重いものがチヨの脚にぶつかった。背中まであるおさを揺らした、六つやそこの少女であった。少女は和子と名乗った。

和子はチヨに懷いた。よくないことだと分かっていたが、チヨは和子が自分に会いに来るのを強く窘めることができずにいた。涼しげな幼い瞳が、チヨを映して思慕の色を湛えるのを見ると、どうしようもなく愛しさが込み上げる。かつて彼女が実の妹にすら抱くことのないような感情だった。あの青年がチヨを拾ったとき、彼もこんな気持ちだったのだろう。そう悟ると、言いようもない嬉しさと寂しさがこみ上げた。幼い頃の己というのは、そうやって自身の中で死んでいくものなのかもしれない。

ある客が、ラムネをチヨに差し入れてくれた。以前来た時に、チヨがラムネをもう一度飲みたいとこぼしていたからだという。チヨが知る中でも特に良い客なのだ。涼やかな瓶が懐かしくて、チヨは目を細めた。ふと思いついて、それを和子にあげた。自分は飲まなくても、目をまんまるにして喉を動かす和子を見ると、あの青年との思い出が呼び起されて、和子がいとおしかった。

チヨは、和子の艶々したおさげ髪が、子供っぽく日焼けした頬が、地面に絵を描く指が、可愛らしいと思った。こんなところに来てほしくないと思いながら、また和子と遊びたいと願った。体調がすぐれず疲れているときも、和子を抱きしめると強張った胸が温まった。

チヨの身体にとって、夏風邪をひいたことは痛手であった。

いやな音のする咳がいよいよ抑えられなくなってきた日、チヨは和子に紅猪口を託した。生物が子孫のつなぎ方を教えられずとも知っているように、実に自然に湧きあがった意志だった。翌々日、チヨの夏風邪は肺炎を引き起こした。

チヨねえさん、と、しきりに呼ぶ声が降っていた。あたたかく湿った掌に手を握られるのを感じた。チヨを慕っていた後輩だった。清々しく青に染まった朝が来ても、チヨは床から起き上がれずにいた。枕元にラムネ瓶を、手元に紅筆を置いてもらって、それをぼんやり眺めていた。

チヨは紅筆をてのひらで包んだ。そのまま、ゆるゆると両手を天に差しのべる。なにかに縋るかのようだった。最後の力で枕元を見た。ラムネ瓶は、朝日をその身にはらんで、さらに揺蕩っていた。

「もういっぺん、あいたかったあ」

空は薄紅色であった。

(三)

好いた人がいた。大学の傍にある純喫茶の給仕だった。彼女は、群を抜いて華やかというわけでもなかったが、ほがらかで笑顔が愛らしい女性だった。身寄りが無いので住み込みで雇ってもらっているのだと、一度だけ身の上を語ってくれたことがあったが、その時すらも穏やかに笑んでいた。この上なく美しい人だと思った。言動の節々から垣間見える、好奇心旺盛な気質にも惹かれた。彼女に会いたくて、毎日のように純喫茶へ通った。徴兵を免除されているのをいいことに女遊びやキネマ巡りに精を出す同級生を、僕は煙たく思っていたの

だが、今思い返せば僕も似たようなものだったわけだ。しかし、その不良的な努力の甲斐があつてか、彼女の方も僕のことを覚えてくれて、よく世間話を交わすようになった。ほんわりした彼女が話す大阪弁がまた可愛らしくて……：：：そうそう、君も知つての通り、僕は大阪出身ではない。だから一層奇麗に、魅力的に聞こえたのだ。

あるとき、どういう会話だったのかは忘れたが、彼女のうきうきした言葉が耳に残つた。「あのとき見た紅猪口が綺麗やつてなあ」「ああゆう口紅使(つこ)うてみたいけど、なかなか手え伸ばせん」と。天使でも見るかのような目つきだった。紅猪口というのは、猪口の内側に紅を塗りつけたものだ。水で湿すと紅が溶け出すので、それを化粧に使う。あのころも伊勢半などが売っているのが高名だった。

実家からの僅かな仕送りと新聞配達の給料とを貯めて、紅猪口を買つた。彼女が一等好きだと言つていた色の絵柄が入っているものを選んだ。海のように深く鮮やかな青色だ。

買ったばかりの紅猪口を持って大通りに出た。硬質なそれをくるんだ紙包と触れている皮膚が熱いような気がした。曲がり角に差し掛かったとき、ふと、彼女の姿を見つけた。目ん玉を殴られるような心地がした。彼女は若い男と親しげに連れ立って街を闊歩していたのだ。彼女の腕が男の腕に絡むのをみとめた刹那、僕は踵を返した。ありふれた失恋であつた。昼下がりのなまぬるい大気が目頭にまとわりついて不快だった。贈る相手のいなくなつた紅猪口を道端に叩きつけようとして、やめた。己の貧乏人根性が恨めしかった。胸の内に冷たい泥沼を抱えながら、空が薄紅色になるまで街を彷徨つた。

生活費をケチつて純喫茶に通う生活は、実家からの仕送りと新聞配達で暮らしながら大学の研究に打ち込む日々へと戻つた。紅猪口は、どうしても処分できなかった。彼女との思い出まで捨ててしまうような気がしたからだ。それを学友の今西に溢したら鼻で笑われた。自分でも女々しいと思う。あのころの僕は厭にロマンチストだったのだ。片腹痛い。

あの子を拾つたのは、下宿屋への帰路の最中だった。ちょうど、失恋した日の夕暮れと同じ、薄紅色の空気が満ちていた。路傍に横たわる檻褸切れに目が留まつた。よくよく見ると、それは少女であつた。ぼろぼろに薄汚れた衣を体に引つ掛けて、虚ろに目を開いていた。白い闇を見ているかのような瞳だった。声をかけると反応があつた。自分の夕飯にするつもりだった焼き芋をやると、少女は、がりがりの小さな手にまでかぶりつかんばかりの勢いで、それを平らげた。思わず、自分の下宿に連れ帰つた。

少女は自身の名を覚えていないと言つた。はじめから親に貰えなかつたのかもしれない。そこで、僕はその少女をチヨと呼ぶことにした。チヨは足を痛めているようだった。まず汚れを取らなければ手当も儘ならんと思ひ、風呂に入れることにした。妹を風呂に入れてやった経験は数あれど、見ず知らずの少女にそうするのは少々気が引けて、大家の婆さんにお願ひした。この婆さんは僕の遠縁である。世話好きな人で、チヨの全身を清めるどころか、婆さんの孫のお古だという衣服をチヨに着せてくれた。少しばかり色褪せた木綿の浴衣を見つ

めて、チヨは口元を綻ばせた。その嬉しそうに上気した顔を見て、毛羽立った心がふつくと整うような心地がした。

また、生活費をケチる日々が始まった。チヨの骨ばった手足が痛々しかったから、ちゃんと飯を食べさせてやりたかった。日に日に血色が良くなっていくチヨを見ると、自分の飯を減らすのも苦にならなかった。

今西に散々からかわれた。今西は物理、僕は化学の専攻だから研究室は違うが、同じ理学部の同級生として、一等気が合う友人だ。「おまえはアホなお人好しやなあ」と僕の肩を叩いた翌日には、「チヨに食わせたれ」と云って、早生柿をくれた。あいつは喧しいがお人好しだったのだ。

チヨには、身体の調子が良くなるまでの間、簡単な読み書きを教えた。チヨは小学校にもまともに行けていなかったようだったが、元々聡い性質(たち)らしく、のみ込みが早かった。

ただ、その聡さゆえ、僕がチヨを養うため無理をしているのに感じてしまったらしい。チヨは、僕に別れを告げた。当然、引き留めようとした。こんな十やそこらの子供が、どうやって独りで生きていくというのだ。一度助けた手前、これ以上迷惑を掛けたくないのを出会って一月(ひとつき)も経っていなかったが、情が湧くには十分な時間だった。いつしかチヨを妹のように思い始めている自分がいた。いま、チヨに出ていかれたら、僕はこれまでどおり呼吸することができるようか。……あのひとへの想いを、忘れることができるのだろうか。そんな、紅色に濡れた我儘が、僕の心臓にべつとりと張り付いていた。チヨが僕を見つめる瞳は澄んでいた。

「これ以上お世話になるんは申し訳あらへん」

「いままでも大変な思いしとおよ。なんとかなるから」

チヨはそう言って、僕の説得を頑として聞き入れなかった。数多(あまた)の感情がぐちゃぐちゃと入り混じった僕の言葉は押し負けてしまったようだ。ついには僕の部屋を飛び出そうとしたもんだから、せめて最後に構わせてくれと言って、僕は折れた。それからチヨを連れて散歩して、ラムネと紅筆を買った。半端にしか面倒をみてやれなかったことへの謝罪の意を込めて。ラムネなんて生まれて初めて飲むのだろう。チヨは目をまんまるにして、最後の一滴まで名残惜しそうに飲んでいた。

あのひとに贈るつもりだった紅猪口も、紅筆と一緒に渡した。身ぎれいにしていって悪いことはないからと。チヨは、猪口に塗られた紅を見つめて、照れくさそうにはにかんでいた。翌日、目を覚ますと、そこにチヨの姿は無かった。人気のなくなった三畳間にへたりこんで、僕は窓の外をぼんやりと眺めた。薄紅色だった空は、うっすら味気なく白んでいた。

それから、暦を淡々となぞって過ごした。アメリカとの戦が始まったころ、今西は海軍の研究所に入った。既に見合いで結婚していた今西は、腹の膨らんだ嫁さんを連れて、配属先

の土地へ向かう汽車の中へ消えていった。あいつの勝ち気で得意げな笑顔を見たのも、「おまえもさつさと嫁さん貰いや」などという軽口を聞いたのも、それが最後だ。僕は大阪で研究を続けることにした。

それからの日々は、あまり思い出したいくない。……この話はよそう。頼む。

終戦後、あの純喫茶の彼女……照子さんと偶然にも再会した。照子さんは、純喫茶があった焼け跡に佇んでいた。夫は結婚後すぐに出征して戦死した。義両親とともに滋賀へ疎開していたのだが、彼らとは元々折り合いが悪く、夫の死がきっかけで殊更に険悪な関係となり、先日とうとう袂を分かった。それで、とりあえず以前勤めていた純喫茶に来た。彼女は淡々と語った。むかし彼女が聞かせてくれた簡素な身の上話を思い出しながら、僕はぼんやりと彼女の説明を耳に押し込んでいた。あのときの僕は、どんな顔をしていたのだろうか。

「理（おさむ）くんが変わりやらんで安心したわ」

僕の名を呼んで、照子さんは微笑んだ。微笑みながら泣いていた。僕は彼女に言った。むかし、貴女に惚れていたのだと。惚れていたよしみで、当面の住処くらいは世話させてくれないか。惚れていたからと言って、夫を喪ったばかりの貴女をどうこうする気は無いから。そんな告白と提案が、あんなにも素直に自分の口から出るとは思わなかった。なかなか想いを伝える勇気が湧かず、口紅なんぞ贈ろうとしていた自分は、もう居なかった。

照子さんと連れ立って、焼け跡の街を歩いた。その途中で、そういえばこの辺りでチヨが行き倒れていたのだと思い出した。長いこと、チヨのことは頭の隅に追いやられていた。余裕がなかったのだ。少し申し訳なかった。

海軍の解体が済むと、今西とも再会できた。彼はぐずる息子を抱え、煙草を吞みながら、口をぼそぼそ開いて「奈良に帰る。落ち着いたら商店でもやるつもりや」と宣った。彼とはその後も細々と連絡を取り合った。僕はといえば、伝手を頼って教職を斡旋してもらい、なんとか稼ぐことができた。

それから、まさに嵐のような日々が過ぎていった。親を説得した末に照子さんと結婚して、働いて、子をもうけ、働いた。社会の動きは目まぐるしい。ついていくのに必死だった。

ちょうど四十年前、今西が連絡を寄越してきた。うちの長女とおまえんとこの長男で縁談を組まんかと言われた。今西の長女というのが、君の母さん、和子さんだ。こっちとしても特に問題はなかったし、二人の相性も悪くはなさそうだったから、うちの孝夫と和子さんは結婚した。

それで君が……ええと、そう、千歳（ちとせ）。いや、すまんね。この年寄りになったら昔のことは思い出すくせに、今のことは孫の名前すら思い出せなくなる。情けない。そう、それで千歳さんが生まれたのだ。

過去を振り返る暇もない人生だったように思う。それでもチヨのことは、米袋に放り込まれた一片の唐辛子のように、ぽつりと記憶の中に埋もれて残り続け、時折顔を出しては僕の

胸を刺した。

あるとき、縛ってでもチヨを留まらせればよかったのだろうか。いや、チヨが出ていくと言い出す前に、田舎の寺へでも預ければよかった。いくらチヨが断ろうが、なんとかして世話なり斡旋なりすればよかったのに。自分の学術書を売る覚悟もないくせに子供を拾うのだから、つくづく僕も青かった。けっきょく氣を使われて、出て行かせてしまつて。

……今思えば、あの子は幼い時分から「諦めて」いたのだろう。まともな生活水準で育った人間なら嫌がるような事を何とも思わない、無自覚のうちに麻痺した人間の氣配を漂わせていた。若く未熟だった僕は、その氣配に氣付けなかった。半端に関わるべきではなかったと、思う。

ただ、本当は、薄々わかつていた。身寄りも金も仕事も家も無い女が、どういう稼ぎ方をすることになるのか。わかつたうえで、頭の片隅に浮かんでいるその可能性から目を逸らして、チヨを手放してしまった。チヨは美しい目鼻立ちをしているから、どうにでも食べていけるだろうと、そんなことを一瞬でも考えなかったのなら、それは清廉な君子であろう。僕は自分が君子である自信を持てない。たとえそういう稼ぎ方をしなかったとしても、闇市で物盗りをすることになるかもしれないし、何にせよまともな生き方はできない。

いっそ道端で見捨てたほうが、変に優しさなんて与えないほうが、あの子にとっては良かったのではなからうか。僕はあの子を、己の一過性の傷を埋めるために利用したのだ。……あのころの幼い自分を殴ってやりたい。

青臭く穿ったロマンチズムのもとで道化と成り、はりぼての奉仕行動に縋り、挙句、好いた人の心の穴につけ込んで結ばれた。あの紅猪口は、そういう僕のありふれた自己嫌悪と悔恥の輪郭をかたちづくっている。

ああ、ちくしょう。

あの紅猪口は必要なかったのに。こうして色々語っても、帰する所、僕が最期に走馬灯で見るのは、五度めの結婚記念日に流行の口紅を贈ったときの、照子さんの、はにかんだ顔なのだろうから。

お迎えの近い年寄の昔話を聞いてくれて有難う。